

引
揚
げ
ま
で

渡
辺
美
知
夫

引揚げまで

渡辺 美知夫

昭和二十年十月初め、旅順在住の日本人は悉く大連に向けて、移動させられた。三日がかりの総退去であった。第一日、第二日は、主として新市街に官舎を与えられていた、官庁や学校関係の家族に割当てられていたらしく、私共も仕立てられた列車で、二日目に、慌しく、しかし比較的整然と立退いたが、三日目に、旧市街の商店や、今で云うサービスマン業の人達などが立退く段になると、空家に取残される家財道具などを狙う地元民が、われ先に押入ってくるので、騒然たる状況になったそうである。しかし、立退く日本人にしてみれば、それらの侵入者たちに抵抗する理由も気力も、もう失せていて、なんとも佗しい始末であったことと思われる。

私共は私が「除隊」して、旅順に立戻る途中、大連で数日身を寄せたA君のアパートに、この際もまた取敢えず引取って貰うことになっていた。切り詰めて貯めこんだ米麥や、庭を掘り返した素人菜園で収穫した、

ジャガ芋やカボチャなどの食料品を、中身をソ連兵に持ち去られた数個の茶箱や行李などに詰めて、前以て送り届けて、一応の手配はしてあったが、とにかく学校の校舎などに割当てられて、集団生活をするにはならず済んだのは、まだしも仕合わせというものであった。当てがわれた六疊間に、一家四人が肩を寄せあって、日本内地への引揚げがいつのことになるのか、皆目判らないまま、ともかくもその日暮らしをすることになった。

ここでA君と私との縁について、少々立入ることにしよう。

私が旅順工科大学予科に、英語担当の「教務嘱託」ということで着任した昭和八年四月に、彼はその予科の新入生として入学した、約一〇〇名のうちの一人であった。茨城県は土浦の出身であった。生徒は入学時に、父兄を正保証人とする外に、現地の誰かに副保証人になって貰う必要があったのだが、A君にはその心

当りがなかった。そこである日、同じ境遇の福岡出身のS君と連れ立って、副保証人になってほしいと頼みに来た。兩人共私とは今迄何の繋がりもなかったたので、私には何故私が選ばれたのかは判らなかったが、制度上早急に決めて届出なければならぬということでもかくも承諾ということになった。S君の方は、早く父親を失って、母の手一つに育てられたが、今では兄が父親代りになって、面倒を見てくれている、ということであった。風邪気だとか、腹具合がどうも、といったような時に、家庭薬を出してやると、びっくりする程利き目のある、母親想い、兄想いの律気者であった。二人共たしか機械科に進んだのであったと思うが、予科、学部 of 六年間を通して、月に一、二度は連れ立って訪ねて来て、一風呂浴び、一杯やって夕食をとり、あとはあしたになるまで、議論に花を咲かせたり、いろんな遊戲に打興じたりするのが習慣になった。ところが、卒業も間近かになったある日、珍しくA君が一人で訪ねてきて、新市街の大連行きのバスの発着する広場に店を構えている、お菓子屋の娘と結婚したいので、その労をとって貰いたいと言出した。副保証人には制度上はそこまでやる義務はなかった筈だが、過

去六年間の縁があつては、むげに断わるわけにも行かない気がした。彼の頼みは土浦にいる両親に手紙を書いて、説得してほしいということであつたので、私は彼にその娘さんに関する情報を求めた。その中に学校は関西のある専門学校を出ているということがあつたので、私は職掌柄まずその学校の教務課へ、そういう生徒が在籍したかどうかを聞き合わせた。学生時代の情報が得られるかと思つたのである。ところが、それに対する回答は、意外にもそのような者は在籍していない、ということであつた。私は驚いてA君を呼び、彼がそういう事情を承知していたかどうかを尋ね、こういうことが判つても、素志は変らないのか、と念を押した。彼の答えはもうそんなことを言っている段階ではない、ということであつた。私はA君の両親に「学歴」のことは伏せて、とにかく二人の結婚を認めてやつてほしい、という初めての手紙を書いた。土浦からは猛烈な返事が来た。副保証人というのは、こういう仕儀に立至らないために頼んだ筈だ、という剣幕である。私はA君にその手紙を見せて、これでは親達の説得はむつかしそうだから、あとは二人で善処してほしいと言つた。私は当時二十九歳になつたばかりの世間

知らずであつた。そんなわけでその後具体的にどういう成行きになつたかは、私の方から訊いたこともないし、向うから話があつたこともない。勿論両親とも会う機会はなかつた。A君は卒業後直ちに大連機械に就職し、大連で家庭を持った。その後も私とは即かず離れずの關係が続いた。終戦のドサクサで旅順を追われた日本人家族は、ムリヤリ大連のどこかに仮住居を見付けなければならず、大連の日本人は誰かを同居させることを余儀なくされる状況にあつた。そんな事情の中で、A君が私共を引受けてくれたのには、全くの赤の他人に這入り込まれるよりは、という計算もあつたことであろう。ところが預けておいた食糧もほぼ盡きようとしたあるよく晴れた日に、私が偶々街を通りかかると、A君が路傍にゴザを敷いて露店を出しているのにつかつた。こういうことをして、なんとか生活費の足しにしようとする人は、日に日にふえていたの、そのこと自体は私を驚かせなかつたが、ゴザの上に並べられた売物の大部分が、私が未練がましく予め預けておいた、数十冊の藏書であつたのが私をドキリとさせた。生活費は折半ということにして、心遣いはしていたものの、これは無為無策に居据つてはいられ

ないぞ、と思わせられた。引揚げ後彼は横浜に住んだ。私が引揚げて間もなく、甲府に住んでいたときに、わざわざ訪ねてくれたこともあつたが、立入った話をする機会もないまま年を経ているうちに、数年前A君が亡くなったという知らせが奥さんから届いた。これでA君との交わりは終つたわけである。

S君の方は撫順にあつた会社で就職した後、海軍の技術將校になり、大尉ぐらいになつたところで終戦になつたらしい。その後は郷里の福岡に落付き、美人の奥さんを貰つて、水道工事か何かの会社を経営しているらしく、上京の機会があると、時々泊りに来てくれたが、最近はそのいうこともなく過ぎてゐる。子供がなくて養子を迎えたという話をきいた。弓道が趣味の、典型的な工科出身型である。

さて話を元に戻そう。

大学は本據地を追われて、やがては自然消滅の運命にあつたが、引揚げるまでは兎も角も教職員の連絡を絶やさぬようにしようということで、いつでも誰でも立寄れる一部屋を設けることになり、息子が旅順工大に入っているという校長さんの計らいで、市中の国民学校の一部屋を事務所として、私は職責上毎日そこに

顔を出すようにした。給与も何ももう出なくなつてはいたが、身分だけはまだ消滅したわけではなかったのである。そこで早速持ち込まれたのが、私と一日違いで応召し、北満かどこかに連れて行かれたまま、遂に帰らなかった石井先生の四人の遺児たちの問題である。石井さんは私の大学の二、三年先輩になるらしいのだが、私は在学中も卒業後も全く接触がなかった。日支事変が泥沼化した昭和十二、三年ごろ、旅順工大でも学生数が倍増して来ていて、英語の教員もどうしても一名増員しなければならぬ状況になった。英語が「敵性語」になる少し前の話である。私は入学試験事務のため―旅順工大は現地の外に、東京と福岡でも入学試験をしていた―東京に出張するついでに、英語教員一名推薦方を、母校の主任教授に願ひ出るよう、時の予科主事から言い付かった。私の歳が若すぎるので、私より先輩を推挙して貰うようにという条件が付いていた。私は同年輩の数学のK先生に、「後進に途を譲る」という話によく聞くが、先輩に途を譲るとは珍しいね」と冷かされながら、兎も角も指令通りに行動した。その結果が石井さん一家の赴任となったわけである。今にして思えば、何とも気の毒なことをしたと思わずに

いられないが、廻り合せて仕方がなかった。

石井さんは当時東京のさる名門の私立中学の教師をしていたらしいが、高等学校の教授になれるというので、進んで転任を承諾してくれたもののようであった。ところが私にシンニウをかけた世間知らずで、それまで一度もしたことのない引越し、それも海を越えての大移動なので、送り出したり持参したりする物など、細大漏らさず問い合せの手紙が来るのには参った。今でも忘れられないのは「風呂桶は持って行った方がよろしいでしょうか」という訊き合わせがあったことである。奥さんも、お嬢さんがそのまま人妻になったという風の、可愛いひとで、すでに小さいお子さんが三人あった。いよいよ着任されてみると、世帯道具の買い揃えをはじめ、何彼と世話の必要があった。暫くして判ってきたことだが、先生は独特の食餌理論に凝っていて、主食は現地のものを摂る主義だというので、菜食主義の上に、米食を廃して、高粱とか粟とかを食べているというのだ。本人はそれでもよいとして、育ち盛りの子供達が心配だと、家内が言い出した。そこで火曜日を招待日と決めて、時折全家族を私の宅に呼んで、米も肉も存分に食べて貰うことにした。子供た

ちは勿論大喜びである。親達も旺盛に食べるので、主義に反するのではないかと冷かすと、「火曜日は特異日だ」ということであつた。やがて昭和十六年の夏、学長の交代があつた。漢学好きの電気学者に代つて乗込んできたのは、文部官僚上りの、明治四十年東大物理学科を出たという人物であつた。学者というより学校行政家であつた。その年の暮には「大東亜戦争」に突入したわけだから、文部省あるいは関東軍の、戦時即応態勢の一環であつたのであろう。「鬼畜米英」を向うに廻す、無謀な戦いに拡大することになって、英語は忽ち「敵性語」ということになり、只でさえ狭い肩身が、いよいよ狭くなつたはまだしも、一、二年経つうちに「勤労動員」というものも始まって、学生達はオチオチ勉強もしていられなくなり、英語の授業など真先に廃止されそうな形勢になつた。そこで凡そ「時局」向きでない石井先生が、早速問題になつた。私はわざわざ東京に出て、先生を推薦して貰つたイキサツがあるので、学長室に出頭し、石井先生を辞めさせるといふなら、私が辞めると申し出た。本当に辞めさせられたら、「内地」に引揚げるのは、もう非常に困難且危険な状況になつていた。流石に私をオイソレと首にする

わけにも行かぬとなつたのであろう、もう何年か前から兼務の形で、事実上仕事をさせられていた学校行政の方を、私の本務として、石井さんは元の如しということにしては、ということになつたらしい。そこで昭和十八年の三月から私の本務は学生主事ということになった。石井さんは何しろ仙人のような人柄なので、そんなイキサツは一向気も付かなかつたことであらう。私は石井さんのそういうところが、時節柄特に貴重だと思つていたので、前記の数学のK先生には「英文学はどうするのだ」と詰問されたけれども、この際私に不満はなかつた。

そのうちに石井夫人は身重になり、第四子の女兒を生んだが、食糧事情が悪化していたためもあって、その頃には健康状態が目に見えて衰えを見せ、やがて結核であることが明白になつた。生まれてきた嬰兒は半身が萎なえていた。そして昭和二十年早々に夫人は亡くなつた。石井さんはその亡骸なきがらを抱えて葬式を出そうとしないと、事務の者が告げに來た。私は已むなく石井さん宅に行き、先生を慰め且説得して、兎も角も葬儀の手配を頼み、相済ませた。それから丁度三ヶ月目に、招集令狀が來たのである。

私の赴任当時以来、英語科の主任はO先生であつた。高等師範系で、アメリカの留学帰りということであつたが、文学とは凡そ無縁の人柄で、奥さんはカリフォルニア大学で化学か何かを専攻した、日系米人らしかった。ところでそのO先生は、石井夫人が亡くなる前年に既に世を去つていた。腸疾患がもとであつた。

一応クリスチャンということになつていたので、私も旅順教会の一員であつた関係もあり、先生の葬儀の下働きを万端相勤めた。その又数年前、先生の三男坊が亡くなった時も、世話役を仰せつかつた。なんでも腸が長過ぎるといふ病氣持ちであつたと聞いた。そんなこんなで私はこの頃「オレはまるで葬儀屋だな」と呟く日もある有様であつた。

ところで石井先生は右の次第で、母親を失つた四人の幼い子供達を残して、応召しなければならなかつた。応召の車中秘かに子守唄を口ずさんでいたと、後に聞いた。そして私も二等兵にされて、家を外にした。石井さんの子供達はO先生の未亡人が引取つて、兎も角も育てていて下さつたというわけだが、さて私も除隊して歸つて来て、やがて大連に移つたとなると、石井さんの子達をそのままO夫人に任せておくわけには行

かない。さりとてA君のアパートは、物理的に引取り不可能である。私自身も何とかA君のところを引払いたいと思ひ始めていた矢先でもあつた。

そこへ降つて沸いたのが「中国経済建設学会」なるものの会員になれ、という話である。この「学会」の目的は、日本人科学者ことにエンジニアを引留めて、共産中国の復興に當つて貰おうというものであつた。工科大学の学生主事は、それに一役買えるのではないか、ということになつたらしい。宿舍もなんとか工面しようということなので、私に否やはなかつた。そこでA君のところを引払つて移つた先が、桃源台という結構な名前の、大連市の高級住宅街の一軒であつた。もとよりその家を私共が独占したわけではなくて、二階には元満鉄理事であつたという、大連郊外の営城子という処に大きな果樹園を経営していたのを、アツという間に接收されたTさん一家五人が入り、私共はもう一族と共に一階を当てがわれた。そこへ石井さんの四人の子供達を引取らなければ、という次第になつたが、幸い長女は一緒の中隊で二等兵を勤めた、物理のF先生が引受けようと申出て下さり、長男は私と同姓で、私より数年後に工大予科に赴任して来たが、間

もなく新設の旅順高校に移った、京大英文科出身の人が引取ろうと言ってくれた。そこで私のところでは二男坊と、半身不随の幼児を世話することに落着いた。これで〇夫人の負担を漸く取除くことができたわけである。

そうなると世間とは口さがないもので、家内がどこかの店で帆立貝の乾物が入っていた木箱を数個貰い受けて来て、私共自身の子供二人と石井先生の子供達の衣類や下着類を入れて、部屋の際に積み上げていたところ、「渡辺先生は月給を貰える身分になって、御裕福とみえて、帆立貝など食べてるらしい」という噂が立った。引揚げが延び延びになるにつれ、銘々の生活が苦しさを加えてきたことの現れでもあったであろう。そういうえば当時は米の飯を食べるなどはたいへんな贅沢の沙汰で、値段もうなぎ登りであったから、常食は高粱であり、粟であり、栄養の補給にしきりに南京豆を噛ったものである。石井さんに先見の明があった恰好であった。近所の豆腐屋さんがわけてくれるオカラも、重要な栄養源であった。うなぎ登りといえば、物価は日毎にドンドン上った。戦前通用した朝鮮銀行発行の紙幣は、もはや紙屑になり果て、ロシヤの軍票が専ら

流通した。それをリュックサックにギュー詰めにして、背中に背負って市場に買物に行く始末である。用心しないとその背中にソ連兵の指先が伸びて来るので、買物するにも随分神経が疲れた。第一次世界大戦のあと、ドイツに留学したことのある学長から、ベルリンの猛烈なインフレの話を、折にふれ聞かされたものだが、今はわが身と、身に沁みて感じさせられる日々であった。

それにもっとやり切れなかったのが、デマと密告の横行であった。今にも帰れそうな噂を眞に受けて、なけなしの家財を売り払って、身軽になつてはみたものの、引揚船乗り込みの指令は一向届かず、いよいよ窮迫の度を加える人達もいた。やがては中央公園のニセアカシヤの大木に、行き詰まった揚句の首吊りが現われるまでになった。これは自然の成行きというより、ソ連、中国側の策畧で、日本人の持物を徹底的に捲き上げる意図かも知れぬ気がした。デマを流すのも、人心攪乱が目的の、意識的な政策の臭いがして、これがソ連流だと思わされた。こういう策畧に乗って、日本人同志が密告しあうことも、段々多発するようになったわけである。何しろ大抵の家に、互いに素性を

知らぬ数家族が犇^ひめきあっているわけなので、襖一枚隣りが油断ならないというわけである。寢言もウツカリは言えない状況であった。(後年観光旅行でモスクワ、レニングラードに行ってみた時も、二回が二回とも同じ悪気流がソ連の社会を蔽っているのを感じて、ウソ寒い思いをした。)

そんな中で、ある日ある人の姿が突然消える。そのまま帰らないこともあるが、中には二、三ヶ月してヒョッコリ帰されてくることもある。そういう場合は例外なく、顔色蒼白になつて戻つた。どこか日の当らぬ処に閉じ込められていたのに違いなかった。そういう中で「洗脳」された人は、以後政治向きのことは一言も口にしなくなるか、見え透いたことばでソ連を、中国を礼讃するのであった。又時には道を歩いているところを、二階の窓から、共産中国の兵士が、気紛れに引金を引いた弾丸に当つて、亡くなる者も出た。何処に訴える術もないことなのだった。そういう雰囲気の中でも、私は何故か「人間はしぶといものだ。なんとしてでも生き延びるものなのだ」と思い続けた。デマかも知れないが日本内地では今、一日に数千人という人間が餓死しているのだという。そんな処にノコノ

コ家族を連れて帰って行くのは問題だ。自分は一日でも長く国外に留まって、日本の飯を食うのを遠慮することにしよう、私はそう思った。これ迄は房々として、評判だった頭髮が、俄かに抜け落ちて、額が禿げ上つた。「国事を憂えたせいだ」と私は言うことにしている。たつた一枚残つた、この頃の集合写真を見ると、当然のことながら、見る影もなくゲツソリと瘠せている。

これはすでに旅順にいる頃から始まっていたことだが、栄養失調による体力の衰えの結果、結核―当時のことばで言う肺浸潤―の既往症のある学生が、次々に再発し始めた。旅順の病院に入院していた一人の学生は、喉頭結核の末期的症状に悶え苦しみながら、付き添つた私に向つて、「こんな姿を見られるのは堪えられないから、どうぞ部屋の外に出て下さい」と、かすれ声をふり絞つた。私は途方に暮れた。大連に移つてからも、結核の再発患者が相次いだ。入院させる外ない。そうなると思費が要る。薬代が必要になる。極く最近発見だか発明だかされた、抗生物質とかいうものが、「トリアノン」という名で出廻っていると聞いても、品薄なのと、大変高価なのが壁になって、思うように

手に入らない。いや、それより前に、それを買う金が絶対的に不足である。私は窮余の策として、元氣な学生達の労働によって得た金の、上前をはねる決心をした。例えば大阪から来ていたY君に出会って、私は彼が時計屋の息子であることを思い出した。「君は時計の修理ができるのか」私は訊いた。「できます」と彼は答えた。当時ソ連の兵隊たちは、日本人から腕時計を捲き上げて、両腕に四つも五つも巻きつけている者もいるのに、私は気付いていた。ある兵隊はそのまま海水浴をして、時計が止まってしまったと不思議がついている有様であった。私はY君にそういう無智な手合いが街にウヨウヨしている筈だから、そういう連中の止まった時計を、なんとか一日でよいから動かして、金を儲けてほしいと頼んだ。又もう一例をあげると、見るからに屈強な軀付きのK君が、埠頭で荷役か何かをやっているというので、彼にも葉代の寄進を頼んだ。

このK君については、忘れられないことがもう二件ある。一つはある日ソ連の船が入港して、その船から女の船員がゾロゾロ降りて来たというのだが、腕が日本人の太股ほどある、逞しい女どもであったという。するといきなり一人の女船員が、丁度そこに居合わせた

K君を、小脇にかい込んでクラブを駆け上ったというのである。もう一件は例の石井さんの末娘のことである。度々言うように、彼女は下半身が不随であったが、そのせいもあってか食欲が不安定で、よくおなかを壊し、家内は手を焼いた。親切な女医さんのお世話にもなっていたのだが、やがて容体が急速に悪化して、とうとう亡くなってしまうた。粗末な、小さな棺を、さてどう処置したものかと思案しているところへ、偶々K君が現われて、「ボクが預かります」と言ってくれた。有り合わせの荒縄で広い肩に背負って、彼は立去った。今思っても不憫で、沈痛な思いがする。

抑留日本人の生活は、ここまで追い詰められていたのである。そうした中で、旅順の教会員であった主婦が二人、青酸カリ自殺をした。口減らしだ、私は直感した。青酸カリは旅順で、万一ソ連兵に辱かしめを受けるような事態になったら、ということ配布されていたものであった。飲んだ薬の分量が多過ぎたのである。遺骸は紫色に膨れ上って無残な姿であった。葬式をしようにも、旅順の会堂はもとより論外である。旅順教会の牧師も、私と同日に応召して、不在であった。(この人も遂に帰らなかった。)私は仕方なく大連

の教会の牧師さんに葬儀を頼みに行った。この牧師は以前幾度か旅順の礼拝にも来て貰ったことがあったのだ。ところが彼は「自殺した者の葬式ができるか」と一喝した。私はショックを受けた。限界状況の中で、平日の教義を振り廻すとは何事か。私はひどく腹が立った。牧師が私を怒鳴りつけたのには、今にして思えば、何か外に私の与かり知らない、別の理由があったのかもしれない、とも思う。そうだとしても、私の心は未だに解けない。序でに言えばその牧師は、ソ連の將校を牧師館に宿泊させて、御安泰であった。昭和二十二年、私共の引揚げた年だが、その冬は殊の外寒さが厳しかった。夜來の雪の降りつもった日曜日、この牧師の会堂は思い詰めた信者で一杯であった。私も会衆の一人であった。ところが、待てども待てども彼は現われなかった。後に彼は「足許が危ないと思ったから」と釈明したそうである。世俗の会社でも、無断欠勤は咎められる筈だと思うのだが。引揚げ後は、宣教百年の記念式とやらで、永年の伝道活動を表彰されたそうである。芽出度い。

厳しい寒さの中で、病床にあった学生が相次いで亡くなるようになった。野辺の送りが忙しくなった。あ

る日火葬場に行くと、降りつもった雪の上に、棺が長い行列を作っていた。火葬の順番待ちである。私は自分が付き添って来た棺がカマドに入る番が来るまで、雪の中に立ちつくした。帰国したらこうして亡くなった学生達の故郷を、巡礼して廻らなければと思った。リストも作った。しかし終戦後の生活の建て直しにかまけて、その志は遂に果たせぬままになってしまった。心残りである。

自殺といえば私には、これ又忘れ得ぬ想い出がある。私が旅順工科大学に就任して間もなくのこと、同僚の中に中国語の先生で、敬虔なクリスチャンの老大人が居られるのを知った。水谷というお名前であった。私はある日その先生に「聖書のどこかに自殺するなという文句があるのでしょうか」と伺った。先生はしばらく考えた末、「どうもそういう文言もんごんは思い付きませんが、あらためて調べてみますから、一兩日待つて下さい」とおっしゃった。数日後先生が私の机に寄つて来られ、「先日お尋ねの件ですが、ハッキリしたそういう文章は見当りませんでした。しかし聖書の精神からして、例えばテサロニケ前書には『常に喜べ、絶えず祈れ、すべてのこと感謝せよ』とありますから、聖書全

体の精神が自殺を禁じていると思います」ということであつた。私は先生の篤実な態度に敬服した。ところがこれは些か後年のことになるが、事務職員の一人が度々先生に金をせびりに行つてゐるという噂が耳に入つた。私は先生を掴まえて「そういう噂がありますか、本当ですか」と確かめた。先生はニコニコしながら事実を認められた。私は先生に、そんなことをさせておくのはよくないのでは、と言つた。先生は何もかも承知の上のことなのですよ、と頬笑んでおられる。私は拍子抜けして、参つたな、と思つたものである。

桃源台での生活はその後、一階に同居していた家族が他処に移つて行つたので、二階のTさん一家と私共との二家族だけになり、互いに親しみを加えて行つた。二階の一家はT氏夫妻に二十才を越したと見えなお嬢さん一人、それにハイティーンの、息子さんと書生一人という構成であつたが、私共の子供たちにとってはおじいちゃん、おばあちゃんの外に、おねえちゃん、おにいちゃんもいる、賑やかな一家になつた恰好であつた。私が感銘したのは、そのお嬢さんが、早速口シヤ語を習い覚えて、ソ連の將校たちの奥さん連相手に、日本人の服飾品その他雑多な品々を、委託販賣す

る店をはじめて、失意のうちにある両親、殊に父親を慰め勵ましていたことである。私共も何度か利用させて貰つて助かつた。当時男たちはすっかり魂を抜かれた形で、皮肉屋のことばを借りると、一同「製フン会社」の社長になり果てていたのを、奥さんや娘さん、つまり女性の側が活躍して、助け支えていた例が少なかつたのが印象的であつた。女は強い。体制が変わろうと変わるまいと、女性には基本的な生命力があるのだ、私はそう思わされた。

T氏一家については、実は私はこの時が初対面ではなかつたのである。YMCAの学生たちと共に、一度その農園に招かれたことがあつたのだ。T氏は嘗てイギリス滞在が長く、二人いたお嬢さん達は向うで教育を受けた時期もあつたらしく、営城子のT氏邸はそっくり英国風の豪邸で、白と紅で仕上げたその館に私は目を瞠つたものである。何という種類か、耳の大きな白とチョコレート色の、毛並の美しい犬が数匹いたのも覚えてゐる。もう一つ思い浮かぶことがある。大連から汽車で旅順に戻つたとき、T氏と同じ客車に乗り合わせたことが二度あつて、二度ともT氏のいでたちは乗馬服であつた。T氏は営城子の一つ手前の駅で降

りた。つまりそこからは馬で御婦館というわけだったのである。Ｔ氏一家の戦前の生活は、かくも優雅だったらしい。Ｔ氏は宰相吉田茂と大学が同期であった由で、吉田さんにチョイチョイ手紙を書いていたと、お嬢さんから聞いた。

序でにもう一つ別の話を付け加えると、大学の事務所を置かせて貰っていた小学校に、わが家の子供達が、石井さんの坊やが通学する後について、毎日のように遊びに行っているうちに、学令一年前の私の長男がいつい一年生の教室に紛れ込んで、クラスのみんなど同化してしまい、とうとう正規の一年生と認めて貰えることになって仕舞った。引揚げの際は、小学校一年の課程を修了したという書付けまで頂いて、それが帰国後小学校編入の際にも、有効と認められ、結局一年トクをすることになった。揆つたいような思い出である。

この頃桃源台には、追々中国人も住むようになったが、日本人の近代的な住宅が住みなせなくて、いろいろ珍談が生じた。例えば厳しい冬を凌ごうというので、ロビーのコンクリートの柱にニクロム線を巻きつけて、そのままスイッチを入れたものだから、屋外の

電柱に据えてあるトランスから黒煙が上り、真黒な油が噴き上った家などもあった。別のところでは、トランスが火を吹いて、大騒ぎになったりもした。そんな事故が頻々と起こるにつけて、「建設学会」の電気系の日本人会員たちが心配して、中国側の役所に出向いて進言した。「大連の電灯などの電力は、遠く鴨綠江遙か上流の豊満ダムの発電所から来ている。そこからの送電線は、日本が管理していた間は、二年毎に全線を見廻り、保守していたが、戦後はそれが出来なくなつて、放置されている。もし停電したら、電灯がつかなくなるだけでなく、水も出なくなる。この際は非点検させてほしい。勿論報酬は求めない」と申し入れた。中国当局の役人は怪訝な顔付きで、「電気が来なくなると、電灯がつかなくなるのは判るが、水道まで出なくなるとはどういうわけか」ということであつたそうである。戦後南太平洋のどこかの島の酋長さんが日本を訪れて、帰りに水道栓を沢山買い込んで行つたという笑い話も思い合わされる。こういう雰囲気の中で、私も少タイタズラツ氣を起こした。風呂に小さなコイルをほうり込んで、電気で風呂を沸かして見たが、スイッチを切らないまま入浴したらどうなるか、一つ試してやろう

という気になった。結果は至極快適であった。電気はお湯の表面にしか流れず、温まっていると、首の廻りだけにビリビリと、電気の刺激があつて、いい気持ちであつた。

さて、中国経済建設学会の方ではその後、少年兵に電気通信技術を教え込む学校を設立することになり、「旅大電気工程専門学校」という長い名前前で、昭和二十二年一月に開校した。私は本職に戻つて、その学校で「英語」を担当することになった。住居も寄合世帯では困るだろうということで、たしか薄町^{すずき}という町の一戸建てを当てがわれた。引揚げが徐々に涉つて、住宅事情にも多少の余裕が出て来たものと見える。桃源台の家と比べると、なんとも安普請ではあつたが、とにかく自分の家族だけが専有できるのが有難かつた。学校の方はもとより初等英語を教えるわけで、私にとって面白味は少なかつたが、生徒達は大変な意気込みで、目を瞠る熱心さであつた。三、四クラスあつたかと思う。全寮制度で、五、六名宛が班を作つて、「切磋琢磨」する仕組になつてゐた。放課後は必ずその日の科目を復習することになつていて、私が驚いたのは、そのとき出来の悪い者を、成績の良い班員が引上げる

努力をしていたことである。この調子で頑張られたら、敗戦日本の学生は遠からず追い付かれるぞ、と思つたほどである。試験をしようとする、生徒の代表がやつて来て、私から問題を受取り、試験は生徒達が自主的に、キチンとやります、と言う。これにも私はビックリさせられた。

この学校で教務主任といった仕事を、引構えてやつていたのは、崔という台湾出身の、電気エンジニアで、歳は三十台半ばかりと思われた。気さくな世話好きで、この人には随分世話になつた。家族のことまで何彼と心配りしてくれた。中国本土の人とは何となくソリが合わないの、そのうちに台湾へ引揚げて、電機会社を起すつもりだと言つてゐた。

この学校に勤めることになつた一人が、旅順工大電気科出身のS君である。私が二等兵を勤めているところへ、「勤労働員」ということで、旅順高女から派遣されて、学生主事室付になつてゐたK嬢に対する慕情を綿々と訴える厚い手紙を寄越した、あのS君である。K嬢の父親は旅順の、中国人のための中学―たしか公学校と言つた―の校長さんであつたが、大連に出てからは今でいうスナックのような店を開いていて、S君

もそこで働いていた。中国人の後押しがあつたのであらう。私はその店で、大好物の「ぜんざい」を御馳走になつたことがある。私が「ぜんざい」を肴^{さかな}に酒を飲む癖があるのを心得た上での、もてなしであつた。それに甘いものは当時貴重な贅品でもあつた。中国の専門学校で、専攻の弱電関係の仕事をするのが決まり、当分は引揚げは出来ないことになつたといふので、いよいよ正式に結婚したいと、S君が申入れて来た。S君の両親は広島県にいるが、当時の状況では連絡のとりようがない。K嬢の両親は勿論結婚に賛成である、ということであつた。私は本気で媒酌の労をとることが出来るような状況ではない。私の仮住居の八疊間と決める外ない。「披露宴」も同じ場所、ということになり、御馳走の材料集めは崔さんが万事引受けてくれ、その当時の状況では望外の賑やかな献立になり、家内が徹夜で調理した。私の役目は結婚式の司式である。私は精魂こめて「誓いのことば」起草し、兩人にそれを読み上げさせることにした。当日K嬢の両親が列席していたかどうか、記憶が定かでないのだが、もし欠席していたとしたら、S君の両親が出席できないこ

とに対する遠慮であつたかも知れない。その日は晴れの日の多い大連でも、殊の外晴れやかな日であつた。崔さんの奔走で、三三九度の道具も整つていた。雄蝶雌蝶の役は、私の子供二人が勤めた。「誓いのことば」を二人して読み上げるころは、教会の結婚式の雰囲気であつた。奉書を捧げ持つS君の手が、緊張に震えていたのが、今も私の眼底に残っている。良い式ができたと自分では思っているが、私はS君に、引揚げた後は、日本であらためて式を挙げるがよいと言つて置いた。しかし数年後東京で再会したとき、広島で本式の結婚式をしたかと聞いてみると、「いや、大連でのような張りつめた気持の式は、二度と出来ないと思います」という返事であつた。只この結婚についても、引揚げ後S君の両親からは何の挨拶もなかつた。勿論会つたこともない。これ又大連のA君の場合同様、男性側の両親は不承知であつたのかも知れない。家内に言われて思い出したが、この結婚にはもう一組、飛び入りがあつた。S君と同期で、同じ職場に就くことになつたK君である。S君が私に媒酌を頼んでいることを聞きつけて、ボクにも意中の人がいると、跳び込んで来たのだ。就いてはまず首実験を願いたい

と、私共二人はあるロシヤ人宅に連れて行かれた。そこに彼女がいるというのだ。どういう訳でそこにいるのかは判らなかったが、サモワールから注いでくれた紅茶がおいしかったと家内は言う。そんなわけで、S君の式が済んだあと、今度はK君の式が続いたことになる。従って披露宴は両君兼用ということになったわけである。数学の、フランス趣味で太つちよのN教授ほか、旅順工大の関係者数名も列席していたようだ。家内の言うところによると、結婚式に漕ぎつける前の数日だか十数日だかは、S、K両君共私のところで三食たべたので、家内はこの時も大変忙しい目に遭ってお陰で身を以て覚えていっているという。私には全然記憶がないところを見ると、私は連日家を外に跳び廻っていたものと見える。

この両君とも、今は活版刷りの年賀状一枚の付き合いになっているので、現況は判らない。

「やれやれ、これでオレの此処での役目は終わった。ソ連の支配下の中国では、「英語」の教師は余計者だ。」私はそう思うようになった。一日でも永く外地に留まろうという私の決心は揺らいだ。そこへ三月下旬引揚げの指令が来た。慌しくなった。石井さんの子供達は、

長女はF先生が、長男はW先生が、夫々そのまま連れ帰って下さることになっていた。従って私は二男坊一人を連れて帰ることになった。荷物は身につけられるものは持ち帰ってよいことになり、私と家内とはフトン袋を作り直したリュックサックを背負い、手には頭陀袋を提げるといふ始末になった。子供達三人にも銘々手製のリュックサックを背負わせた。その外私は旅順郊外の牧場で織られたホームズパンを、大連の丁字屋という店で仕立てて貰った、気入りの背広の外に、もう一組背広を重ね着した。これは旅順赴任が決った記念に、東京で大憤発して新調した、モーニング地の背広であった。そういえばT氏一家の引揚げ支度を手伝っているとき、銘々が服の襟をほいたりなどして、大事な書類や小物を縫い込んでいるのを見て、感心したが、中でも息子さんが、履いて帰る靴の踵をくり抜いて、大型の金時計をはめ込んでいるのを垣間見たときは、度胆を抜かれる思いであった。帰国後の生活設計に、みんな必死なのだなと思わせられた。

私たちは昭和二十二年三月下旬、指令通り引揚者收容所に一旦集合した。半日待たされた揚句、漸く乗船許可者の名前を、ソ連の軍人が読み上げ始めた。大変

な数である。やがてWの項目に差しかかったが、ミチコは呼ばれたが、ミチコはいない。これは大変なことになったと肝を冷やした。平常こういう間違いはチョイチョイ起ってはいたのだが、今の場合は笑いごとではなかった。私は台帖の見直しを頼んだ。結果は思ったより簡単に、ミチコがミチコに訂正された。ホツとした。乗船直前に、あらためて所持品の検査があった。私がこれだけだと、細字で書き貯めて、忍ばせておいたメモが、このとき見付かってしまい、病歿学生の名簿などを巻き添えに、アツという間にストーウにくべられてしまった。今思い出してもホゾを噛む思いである。

船は三、四千トンの「第五大拓丸」とかいいう貨物船であつた。乗り込むとすぐ、俄造りの急な梯子を降りた。奈落の底のような深い船底に着いた。荒ゴザ一枚を敷いた一隅に、一家五人が固まって坐つた。これで一応席が定まった。あとは出航を待つばかりである。同居していた家族たちも、次々に引揚げて行つたあとなので、見送り人の心当りもあるわけではなかったが、一応上甲板に出てみることにした。埠頭には果たしてほんの三、四人が佇んでいるだけであつた。やがてい

よいよ船が動き出すと、その人たちも手を振り、デツキに目白押しの引揚者たちも、誰からともなく手を振つた。船が岸壁から遠ざかるにつれて、「サヨナラ」「サヨナラ」と銘々が叫んだ。誰に呼びかけるともない叫びであつた。そのうちに一人の男が、「バカヤロー」と思い切り大きな声を出した。万感が籠つていた。

幸い海は静かであつた。帰省と帰任のため、今迄幾度となく往来した海ではあつたが、海の表情はその都度ちがつていた。こんなに静かなことは珍しいと思つた。私達は早朝からの緊張と労働に疲れ果てて、ムシロの上に横になつた。船の鉄板は只一枚らしく、船の進行につれて水音がピチャピチャと聞こえた。「板子一枚下は地獄」ということばが、フト胸に浮かんた。これからどうなることか、前途の不安について目が冴えて、寝付かれなかつた。

船中の一夜が明けた。船は快調に進んでいる。敵の潜水艦の心配も、もうないのだと思つた。虚脱感があつた。逝く水の、岸の窪みに淀んだような、遼東半島での十五年であつた。日本内地で次々に起つた血腥い事件も、私共には直接の衝撃にはならず、世界の激しい動きからも、いつも取残されて、いわば安逸を食つ

ていたのだ、という気がした。とつ追いつしていると、何処からか「平均運動」をやる、という話が伝わって来た。銘々の所持金品を吐き出しあつて、均等に分配しようという動議であつた。今更めいた感じであつたが、海の上のことでもあり、適当に「献納」して、よろしいように処理して貰おう、という空気であつた。

どれだけ集まつて、どれだけ誰が受取つたのか、報告はなかつた。抑留生活の余波も、これが最後であつた。

船中の日がまた暮れた。寝るより外にすることがない。夜も更けた頃、俄かに周囲が騒がしくなつた。上甲板に出てみると、みんなウロウロと落付かない。若い女性が一人行方不明だという。やがて船は進行を止めた。方向を変えて、元来た方へ引返し始めた。雲一つない空に、まん丸な月がかかり、紺碧の玄海灘は月影を碎いて波打っている。かなりの距離を引返した船は、今度は大きく輪を描いた。投身した女性の姿を求めているのだ。勿論見付からなかつた。船はやがて搜索を打ち切り、一声夜空に告別の汽笛を鳴らした。船は元の航路に還つて、目指す日本に向つて速度を上げた。身投げした女性は、ソ連兵の子供を身籠つていたのだという。こんな軀で故里に帰るわけには行かぬと、思

ひ詰めたのであろう。ここにも一人、戦争の哀しい犠牲者がいる。胸の奥に波音が衝き入る思いであつた。

夜が明け放れて、島影が目前であつた。九州佐世保の港外に着いたのだ。昭和二十二年四月一日であつた。佐世保は今迄海軍の最重要根據地で、一般人の立入りは厳禁されていたわけだから、辺りの地形は誰も見た者はなかつた筈である。複雑に入り組んだ地形の、一面灌木林に蔽われた、美しい小湾が、幾つも入り組んでいた。私共はその海岸線に沿つて、崖の上の小径を、相当の距離歩かされた。祖国の土を踏んだ安心感で、足取りは軽かつた。湾内には小型の駆逐艦が二隻、横並びに繋がれていたが、人影のない様子が、虚ろな空気を漂わせて、敗けたのだという感慨を催させた。やがて入国手続をする場所に着くと、いきなり頭のテッペンに白い粉をふりかけられた。襟首を上げて、背筋にも同じ粉がドツと吹き込まれた。DDTという消毒剤だそうで、ノミ、シラミの類を征伐し、流行病を防ぐのだ、ということであつた。白布をかけた長いテープルの向うに、日系のアメリカ兵が坐つていて、簡単な身許調べがあつた。日本人の顔をしたアメリカ兵は、海の向うのソ連兵と違って、遙かに優しく、親

しみが持てた。

一息入れた後、私共は行列を作つて、国鉄の駅まで歩いた。南風崎という駅であつた。ハエノサキと読むのだと知つた。ハエとは風の名なのだつた。プラットフォームに出て、私は驚いた。そこには荷物が山積みになつてゐた。旅順を追われて大連に向うとき、旅順の駅は略奪に遭つて、一物残さず剥ぎ取られていたが、敗けた筈の日本の駅には物資が溢れ、誰も持ち去る者がいない。これは大きな救いであつた。かすかながら前途に光明を見る思いがした。

客車は座席が取払われていて、そこに銘々持ち帰つた荷物が積み上げられた。驚いたことにフトン袋あり行李あり、従つて荷物は積み上つて天井近くに至り、人間はその上の狭い空間に這い上るのだった。そんなにモノを持ち帰れたわれわれは、仕合わせな部類であつた。元旅順工大の事務官で、新京の関東局に移り、そこで終戦を迎えたKさんなどは、在留邦人の引揚げの世話を焼き通した上引揚げて来たが、彼が舞鶴に上陸したとき、その姿は背中にリュックサックは背負つていたものの、中身は箸代りの木の枝二本、それに銚子か何かのあき罐一個、只それだけで、足にはベッチャ

ラ下駄をはいていたという。その人の旅順在勤時代、私はどうにも彼に親しめなかつたものののだが、彼の新京での奮闘ぶり、それに上陸時の姿の話を聞いて、今では認識を改めている。そういえば関東局の文官の長官は、逸早く密航船か何かで逃げ出したとのことであつた。関東軍司令官は、私が学長のお伴で度々新京に出張して、会つたことのあるU將軍から、Y大將に代つていて、そのY將軍は戦後モスクワに連れて行かれたそうだが、その後生還して、東京に佗住居していた。私は偶然その家の前を通りかかったことがあつて、複雑な思いをした。関東軍は終戦の十日前に、隠蜜裡に、一兵残らず、ソ満国境から姿を消していたと聞いていたからである。

さて汽車ははるばる東京は品川までわれわれを送つてくれるのだそうだが、途中で降りる人も次々出る筈で、息苦しさも追々減るだろうということであつた。汽車（當時は正に汽車であつた）が門司だか下関だかに着いたとき、われわれの船仲間の「衛生係」を勤めてくれた、四十がらみの男が下車して行つたのだが、彼は衛生係として預つてゐた急救薬や薬品類を、ソックリそのまま失敬して行つたことが、汽車が動き出し

てから判った。彼の生活を一、二ヶ月は支えられるだろうということであった。広島も当然通ったわけだが、夜の暗闇の中では何一つ見えなかった。私の故里は西宮なのだが、この辺りは晝下りの時刻に通った。荷物の上数十種空いた隙間から覗くと、阪神間は全くの焼野原、瓦礫の山であつた。海まで見通せそうな気がした。私の生まれ育った家屋敷も、終戦直前の爆撃に焼かれて、両親はじめ一族は私の家内の里である茨城の町に引取られ、身を寄せていた。私共も取敢えずそこを目指しているのである。富士山が見えたかどうか記憶がない。やがて列車は湘南地方に差しかった。大磯あたりの小駅に、石井さんの兄さんが、石井さんの二男坊を迎えに出ていることになっていた。汽車はその駅にほんの数分停車した。兄なる人は来ていた。私は二男坊を引渡した。この間双方が殆ど無言であつた。兄なる人はそれほど不機嫌だったのである。石井さんと私の縁は、これでフツツリと切れてしまった。

品川駅に着いた。私共の引揚げはここで一段落である。私共は皆と別れて、上野駅に向つた。東北線に乗換えるためである。電車はスシ詰めであつた。その中で第三国人らしいのが家族共々横坐りで、数人分の席

を占領していた。文句あるか、という顔付きであたりを睨め廻していた。浅間しかった。

私達は家内の両親はじめ兄弟たちに、いたわりを籠めて迎えられたが、私の胸には今後の生活の問題がのしかかつていた。みんなの勧めで、一兩日休養したあと、私はこれ又ギユウ詰めギユウの汽車で、東京に出た。引揚げ早々の学長を挨拶かたがた訪ね、その勧めで文部省に挨拶に行った。会う人々が昔のままなのが何となく不思議な気がした。正直、私は自身戦争責任を問われても、仕方がないと思つていたからである。助かつた、という思いよりも、これでいいのかな、という気持ちの方が強かつた。一人の課長が全国到る処に新制大学ができて、教員不足で困っていると教えてくれた。これ又私には素直には喜ばなかつた。話が旨うますぎる。そんな筈ではなかつた、私はそう思った。大連の抑留生活中、私の考えたことは、これから中国をはじめ、アジア各地や、南太平洋の島々などから、生き残つた人達が続々と復員してきて、日本は大変な就職難になる。自分など何処か田舎の中学の教師にでもなれば仕合わせと思わねばなるまい、ということであつた。私は秘かにそう覚悟して帰つて来たのである。然るに

何ぞや、という思いであつた。課長との面談を終えて廊下に出ると、一人の中年の男が、業者らしい男に向つて、「今夜空^あいてるよ」と言い掛けているのに出喰^{でく}わした。切ない思いであつた。「無理もないけど、世の中荒廃^{わがや}してるな」私は呟^{ささ}いた。

今迄大学で講義したことなど一度もない私に、東京をはじめ、北は北海道、南は九州、その外和歌山などからも、大学の教員の口がかかる。冗談ではない。日本は「文化国家」になるのだそうだが、この分ではその「文化」とは、「文化鍋」や、精々「文化住宅」並みの、安手なものになるのではないか、それでは折角敗けた甲斐がない。私は一旦引下つて考え直さねば、と思った。しかし家族のことがある。係累^{けいり}のことも何とかしなければならぬ。遂に私はお茶の水の東京医学歯学専門学校の講師の口を選ぶことにした。ところが仕事を始めて間もなく、兼任で東京医科歯科大学予科にも出講してほしいと、学長直々の談判である。予科教授ならすでに経験がある。只その予科の在り場所を聞いて驚いた。霞浦の突端の、元海軍航空隊の跡だというのである。君の住所が茨城だと聞いての上のことだ、と言われ、私はついついそれも承諾した。予科の

授業は三日で切り上げて、その間は泊まりこむという条件をつけた。霞浦界限を見物してやろうという魂胆もあつた。

予科への出勤は思いの外に大変であつた。茨城の西の端の町から、当時の不便極まる交通機関を乗り継ぎ乗^{のり}り継ぎ、土浦に出て、そこから今度は木炭バスで霞浦の西岸を、途中でバスがエンコしたのを後押ししたり、木炭を補給する作業を待ち合わせたりしながら、やつと辿りついた停留所から、浦に向つて小一里歩かなければならないと、判つた。半日仕事である。今更仕方がない、私は覚悟を決めた。

爆撃されて、屋根に大穴があいて、トタンだか何だかが垂れ下がつたままの、大きな格納庫が、そのままになっている、廃墟で授業が始まつた。生徒は大部分が海軍の予備学生とやら、航空兵とやら、要するにこの航空隊に所属していた軍人上りであつた。学習態度は眞剣で、眞面目で、私はホツとした。当時のことで、生活施設は何かと不自由であつたが、一番困つたのはしょつ中停電があつたことである。私は家内の弟が造つてくれた、お手製の、大小の燭台を持込んで、重宝した。その蠟燭の火に吸い寄せられるように、夜な

夜な、元海軍々人が押掛けてくる。彼等の訴えを聞くうちに、私は此処に来てよかつたと思うようになった。彼等の訴えはこうである。

「自分は天皇陛下の御為に、一命を捧げることが、男子の本懐、自分の本分であると信じて疑うことなく、軍人としての勤めに励んで参りました。ところが、敗戦と共に、一朝にして、私の信念はにべもなく否定されるようになりました。私は支柱を失った心地で、どうしてよいか、判らないのです。」

誰がこの眞剣、率直な訴えに即応できるだろうか。

「忠君愛国」も一つのイデオロギーなら、「万国の労働者よ、団結せよ」も、もう一つのイデオロギーである。抑々イデオロギーなるものは、処世のための、他律的な道具に過ぎない。トンカチかノミのようなものである。一方をもう一方に持ち替えることは、その気になれば簡単にできるが、所詮は行き詰る。行き詰らないためには、自己を騙し続けなければならない。今私の前にいる元軍人は、それが出来ない、あるいはしたくない、と言っているのだ。私はこちらも心をこめて、ひたすら聞き役に徹するように努めた。宿泊中毎夜こゝうした「対話」が続いた。私にとってかけ替えのない、

貴重な体験であつた。しかし、残念なことに、私は此処にたつた一年しか留まることができなかった。

これから私の学校遍歴が始まる。

(一九九二・一一・二五)